

「第4回阿蘇フォーラムまるごとフェスタ」への参加報告

1. 参加の趣旨

「阿蘇フォーラム」は、阿蘇の地域づくりを目指して様々な活動を行っている団体や個人のネットワークであり、「阿蘇のすばらしさを知る」「自然や文化の活用と保全を考える」「阿蘇の未来をつくる」の3つを主な目的に、国立阿蘇青年の家内に事務局を置いて活動している。これまで毎年1回「まるごとフェスタ」と称してシンポジウムや農産物の見本市などのイベントを開催してきた。今年度、第4回目が開催されるに当たり、環境省では、地域づくりの担い手やそれに関心を持つ人々との連携が不可欠との観点から、「阿蘇草原再生」の趣旨とその取り組みを紹介し、阿蘇の地域づくりについて共に考えとともに草原再生への合意形成の推進に役立てるため、調査・事業の一環としてこれに参加することとした。

2. 「まるごとフェスタ」の開催概要

- (1) 開催日： 平成 16 年 10 月 30 日（土）・31 日（日）
- (2) 開催場所： 国立阿蘇青年の家
- (3) 開催テーマ：「若者たちの阿蘇」
- (4) プログラム：

第1部 阿蘇自由学校 10月30日(土) 若者たちの阿蘇		
日時	項目	内容
13:00~14:30	基調講演：中谷 健太郎氏 (湯布院亀の井別荘主人)	演題「人が地域をつくる 湯布院興隆秘話」
14:30~15:00	環境省 草原再生プロジェクト	映像を使用した、事業の紹介
15:10~16:30	3分間熱血主張バトル&コンテスト	阿蘇での地域づくりにかかわる活動や想い、今後の計画などを主張し、会場参加者の賛同と支援を競うコンテスト
16:30~17:30	大噴火討論会	
(休憩)		
19:00~	懇親会・夜なべ談義	
第2部 阿蘇見本市 10月31日(日) 阿蘇のNPOや各種団体、名人・特産品が大集合		
10:00~15:00	体験交流、発表・展示(ステージ発表)	各種体験コーナー、阿蘇の郷土芸能・音楽・演劇などの発表
	発表・展示(ブース展示)	阿蘇の団体や施設などの、日ごろの活動展示発表や参加呼びかけなど
	農産・加工ブース(食の体験)	阿蘇の名産などの試食と販売
	農産・加工ブース(農の販売・商談)	生産者が消費者や流通と接することで、阿蘇の本物の農をアピール
	工芸&フリーブース	工芸・陶芸などの展示・即売及びフリーマーケット&リサイクル

3. 「阿蘇草原再生」プロジェクトとしての参加

企画段階で阿蘇フォーラムまるごとフェスタの実行委員会に参加し、計画づくりに関与するとともに、当日、下記のようにフェスタの一部の運営を受け持った。

< 第 1 部 >

基調講演

講師の中谷健太郎氏(湯布院亀の井別荘主人)への出演依頼、送迎、会場設営などを担当。中谷氏の講師選任については、まるごとフェスタ実行委員会から全面的な賛同を得た。講演内容要旨については別紙参照。

環境省 草原再生プロジェクト

阿蘇の草原の危機的状況と、その解決へ向けての環境省の取り組みを、環境省九州地区自然保護事務所担当官が映像を用いながら紹介。

< 第 2 部 >

「阿蘇草原再生プロジェクト紹介」ブースの設営

「発表・展示(ブース展示)」及び「農産・加工ブース(農の販売・商談)」を兼ねて「阿蘇草原再生プロジェクトコーナー」を設置し、ブース周辺で以下の展示等を行った。

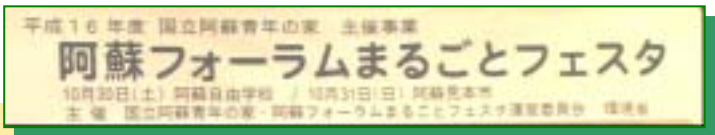
- ・ パネル制作・展示：
 - 阿蘇草原再生プロジェクト紹介の A1 版パネル 10 枚(うち 6 枚を新規に制作(別紙参照)、2 枚はパンフレットコピー、2 枚はランドサット衛星データ画像でみる草原現況)
- ・ チラシ等の配布：
 - ニュースレター NO1~4、牧野組合調査結果報告チラシ、阿蘇草原再生パンフレット
 - 阿蘇草原再生シール紹介のチラシ、メッセージカード
 - 阿蘇草原再生シール商品取扱店の紹介リーフレット(各店提供による)
- ・ 阿蘇草原再生シールを貼った農産物の販売：
 - 草原再生シールの協力生産者に出品を呼びかけたところ、産品出荷状況などから 6 名が応諾、当日、各生産者から 5~24 袋、計 96 袋を預かり、会場で来場者に趣旨を説明しながら販売した。販売単価は 100 円~1000 円、合計で 2 万円を超える金額であったが、完売した。

< 出品者と農産物 >

氏名	住所	出品した農産物
阿部クニエさん	阿蘇郡阿蘇町	自然薯
市原啓吉さん夫妻	阿蘇郡一の宮町	ジャガイモ
岩下美津子さん	阿蘇郡一の宮町	カボチャ、サツマイモ、白菜、サラダ菜
甲斐イチヨ、春人さん	阿蘇郡一の宮町	ハウレンソウ、チンゲンサイ
後藤克征さん	阿蘇郡白水村	自然薯
宮崎初代さん	阿蘇郡阿蘇町	プチトマト

- ・ 草原再生シール商品に関するアンケート調査の実施：
 - 商品購入者を対象にしたアンケートを行い、37 名から回答を得た(集計は、直売店で回収する調査票と合せて行う予定)。

1 日目 / 10月30日(土)



湯布院賑わいの仕掛け人、
中谷健太郎氏の基調講演
「人が地域をつくる 湯布院興隆秘話」

・阿蘇フォーラムまるごとフェスタ
実行委員長・井信行氏のあいさつ



・会場からの質問を受ける中谷氏



2 日目 / 10月31日(日)阿蘇見本市「食と名人と仲間たち」

草原再生シールを貼付した農産品の販売を中心に、阿蘇草原再生プロジェクトをPR



・生産者の協力により集まった農産品販売コーナー



・野草を使った農産品の良さをアピール



・ブース内では草原再生の取り組みをパネルで紹介



・アンケートに答えて阿蘇の産品を当てよう

(別紙) 基調講演 / 中谷健太郎氏による講演要旨

湯布院のいま

- ・ 近頃、「怒り」で少し元気になっている。それは、湯布院でも町村合併が進もうとしているためだ。国の優遇措置を受けるとするのが理由になっており「物取り」の精神が消えていない。これは地域の自立に逆行することだと思う。

先人たちの想い

- ・ 湯布院のまちづくりは、40年前、私たちの世代の者が東京から帰ってきたことがきっかけ。帰ってきて5年間は田舎に面白さを見出せず何もしなかったが、将来が見えてこないという絶望に苛まれ、5年目にどうにかしなければと思い立ち52日間ドイツの視察に出かけることになった。
- ・ その際に唯一事前に勉強したのは、ドイツやフランスの農村の状況ではなく湯布院の過去だった。隠れキリシタンの村だった湯布院は、江戸期には表に出ることができず豊かではなかったが、明治になりそれまで表立って使えなかった温泉を使用できるようになり急に元気になったことや、文化人から高い評価を得ていたことがわかった。さらに、過去を探る過程でドイツに出かけるきっかけにもなった「湯布院温泉発展策」に出会う。それは、今から80年前、国立公園制度づくりのための調査で来訪した本多静六博士の報告書だった。しかし実はその大半が、湯布院の先代、先々代の人々の手によるものだったと思われる。博士の「豊かさとは人間が自然の中でどれだけ気持ちよく過ごせるかであり、そうした村をつくることに力を注ぐべきだ」という話を聴いて感動し、例に挙がっていたドイツの農村を理想に掲げながら、自分たちの村づくりについて議論を重ね構想をまとめたものであり、それが博士の名前を借りて30ページに渡り記されていた。
- ・ 地域は常に外からの情報を取り入れて変化しているものであるし、変わっていく必要があるが、一方で変わらぬものを持ち続けることが必要だと思う。また、水平方向でみると色々な意見を持った人々がいるが、そうしたヨコ軸に対して歴史を振り返ってみて変わらぬもの、いわばタテ軸があることによって人々がまとまりやすくなる。40数年前に地元の人々の思いを結実させたこの構想を発見し、これでいける、という確信をもって、ドイツをめざしたのだった。

まちづくりの基本路線

- ・ 視察から帰って来てからはいろいろな提案をしたが、最初は聞き入れられなかった。動き出したのは、帰国5年目今から30年ほど前のことで、「人と人との出会いを大切にしたい、人々の心と体を癒す場づくり」に徹した湯布院のまちづくりが始まった。先代の描いた夢がここにきてようやく開花した。
- ・ ドイツで見てきたのは、東欧からの難民受け入れのために作られてきた、農村などで一般の人々がボランティアで食事や宿泊の世話をする仕組みとネットワークの存在だった。これはだんだんかたちを変えていったが、今もグリーンツーリズム、アグリツーリズムの中にその精神が生かされている。
- ・ まちづくりには、人と人との出会いの場をつくる核になるものが必要だが、従来のように、温泉や旅館などのような施設や、食べ物を中心にするのには限界がある。日本の旅は、

歴史を見ても分かるように、本来は長期滞在型だった。戦後、一泊で帰るバスツアーのように、大人数を相手にすることで生産性を上げる大量消費タイプのものが、一般的な旅の形として定着した。旅に限らず、農業や産業も大都市に目を向け大型化が進んだが、湯布院では、身の丈にあった暮らしにこだわってきた。農村型の空間を維持し、都会の人々にいやしの場を提供する、というのが湯布院のまちづくりの基本である。全国でゴルフ場や別荘地開発が盛んに行われた時代も、我々はそれに反対し、その代わりに、湯布院の環境や空間を維持するためにかかるお金の一部を、この地を愛して毎年やって来る人々にも負担してもらおう、という「牛一頭牧場運動」を始めた。

湯布院のまちづくり「第2幕」

- ・ 80年前に先祖達が立派なことを考え、35年前に核心をつかみ、30年間、まちづくりに努力し、良い評価も受けてきた。観光客が400万人も来るようになり、資本を呼び込むことにも成功している湯布院のまちづくりは、資本の論理に照らし合わせれば成功だと評価されている。しかし、地域の今後についての決定権を他人に委ねることにもなる合併への動きを見ると、疑問を感じる。最近の観光資本は、他所から人や金を引っ張り込んでむさぼり摂ろうとする精神がまさっている。地域づくりとは、湯布院を舞台に、他の地域をも巻き込みながら、身の丈に合った人間関係を作ることであり、それが地域の発展につながるという感覚が、地域の人たちの間にも十分に育っていなかった。30年たって第1幕は終わりを迎えた。そこに足りなかったものが何なのかが、31年目からのテーマだ。
- ・ 湯布院では、資本の論理に取り込まれないで、本当の意味での癒しの場を提供したい。第2幕でも足がかりにしたいのは、ヨーロッパの例と湯布院で牛1頭牧場運動から続く「親類クラブ」の試みである。これは、農家が土地を売らないでも生活できるようにするための試みで、農村の人たちが農村の空間・環境の維持に努める代わりに、都会の人々から直接資金を得られるようにするというものだ。
- ・ 今の時代、農業は産業としてだけでは成り立たなくなっている。ヨーロッパでは、農村風景を世界遺産に指定したり、助成はするのだが農家ではなく指定農家の農産物を買う人に補助金を出し農家側の競争も促したり、といった仕組みができています。

これからの阿蘇づくりへの期待

- ・ いつ来ても感動するのだが、阿蘇は広い。その広さを生かして資源とエネルギー循環の仕組みを創り出すとよいのではないか。ドイツでは、牧場を持つハム工場が地域を巻き込んでメタンガス発電まで行い発展していった例がある。このように民間企業との連携も考えられる。今話題のライブドアやソフトバンクも、野球ばかりでなくそのようなことに金を出せば、少額でも大きな宣伝効果が得られるのではないだろうか。
- ・ 阿蘇には多様な人々を受け入れる、都市型社会の要素もあるようだ。ゆとりを持ち、活力もある「悠々都市」とも呼べるような新たな地域づくりを期待したい。